

北水試 百年 こぼれ話

⑨北水試50周年 水族館公開記念写真

キーワード：北水試50周年、記念行事、水族館、増殖部、職員集合写真、水産技術講習所、第二期生

今回は、北水試創立50周年の記念行事の一つとして、増殖部が行った「水族館」前での職員集合写真（写真1）について紹介します。この写真の人物部分が、北水試百周年記念誌（2001）に掲載されています。水族館と言っても、余市町の旧庁舎のグラウンドの横に建っていた試験研究用の「水族実験室（棟）」（図1）です。現在でも、水試の一般公開で行われる、生き物と触れ合えるタッ

チプールや展示水槽などの「ミニ水族館」は家族連れに人気がありますが、娯楽の少なかった戦後間もない地方都市ですから、大いに賑わいました。50周年記念行事については、北水試月報8巻10号（1951）に詳しいですが、10月5～7日の3日間で、水族館への参観者数は約2万7千人だったと記録されており、現在の余市町の人口約2万2千人を



図1 北水試本場（余市町）配置図（水産研究所要覧（1952）より）と水族実験室（網掛け部）の位置

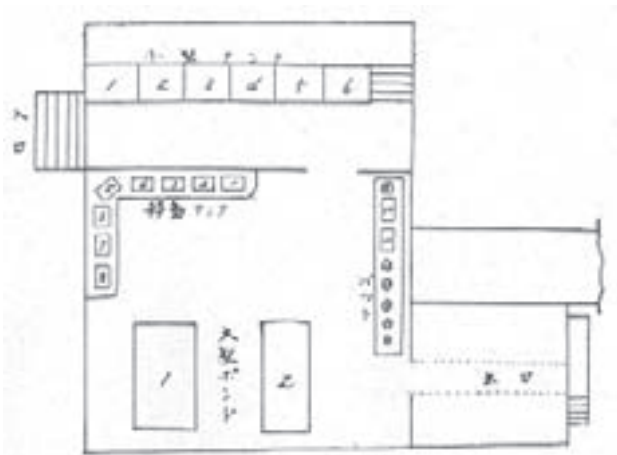


図2 水族館内略図（北水試月報8巻10号より）



写真1 北水試50周年水族館公開記念写真
（敬称略：前列右から中島将行、川合豊太郎、木下虎一郎、廣部武男、西川精一、中列右から高木康夫、徳保美津子、笹木弘、後列右より近藤一雄、大原正司、梶初枝、植木忠男、寺井勝治、最後列に横山善勝）

上回る驚異的な数字です。水族館として使われたのは、鹹水水族実験室（図2）で、大中小の水槽・タンク・バットが24個用意され、魚類39種、貝類6種、その他カニ、エビ、ヒトデ数種を集めて放養しました。案内係として17名を配置し、参観時間は午前8時から午後8時までと、かなり力が入っていた様子が見えがえます。

次に写真説明に入ります。最後列に白衣を着て写っている横山善勝さんは魚礁調査に長く携わっていた増殖部OBで、私も存じていましたので、OB会にお邪魔した時、この写真について聞いたところ、白衣を着た職員が増殖部の研究職員であることがわかりました。前列中央に、昭和天皇の昭和11（1936）年ご来道時に知事からの献上品の一つである「北海道産貝類写真帳」を謹製した木下虎一郎増殖部長が陣取り、右には、後に小樽水族館館長に転じた川合豊太郎さん、右端に後に江ノ島水族館マリンランドなどを経て横浜八景島シーパラダイスの園館長などを歴任された海獣類専門の中島将行さんが写っています。木下博士の左は、この写真を提供された廣部武男さんで、その後行政畑へ転じ、支庁の水産課や海区漁業調整委員会事務局長などを歴任されました。私が現在所属している稚内水産試験場の渡辺和記総務部長の母方の叔父さん（弟）だということが最近わかり、水産業界の縁に驚いた次第です。前列左端は西川精一さんで、後に行政畑へ転じて、水産改良普及事業に係わる仕事をされました。その後ろは、寺井勝治さんで、釧路水試魚介科長を経て函館水試と網走水試の増殖部長として増殖部門の研究職員の道を歩まれました。私服の女性2人は、増殖部の事務職員の徳保美津子さん（中列中央）と梶初枝さん（後列中央）です。

残りの背広姿の男性陣は、北海道水産試験場本場に開設されたばかりの「水産技術講習所（履修

期間2年）」の第二期生の中の5名で、横山さんは「良くわからないので、余市町在住の普及員OBの大原正司さん（後列右から2番目）に聞けばいい」と言われてビックリ。北水試とサハリン漁業海洋学研究所との研究交流で受け入れていたロシアからの女性研修生（研究員）の宿の近くに自宅があったので、面倒を見てくれていた大原さんだったとは！写真が若すぎて全く気づきませんでした。大原さんは、戦後シベリアに抑留されていて、ロシア語を覚えたと聞いていました。5名の中で、普及員となったのは、大原さんと植木忠男さん（後列右から4番目）で、植木さんは、出身の日高支庁幌泉地区をはじめ各地の水産業改良普及所長を歴任されました。高木康夫さん（中列右端）は漁業者になられたそうで、近藤一雄さん（後列右端）は、北海道漁連に勤めて営業本部大阪支所長などを歴任されています。変わり種は、笹木弘さん（中列右から3番目）で、大原さんとシベリアの収容所で一緒に暮らしていたそうで、偶然二期生として余市町で再会したそうで、後に留萌管内の苫前町の総務課長や教育長を歴任されました。

まだまだ調査不足な内容ですが、写真1枚でも、小説が書けそうなくらい皆さんの人生が凝縮されています。

最後になりますが、講習所修了後、留萌管内の増毛町で水産改良普及員となった大原さんは、ニシン漁衰退後の沿岸漁業としてマガレイ底刺し網漁業の振興を図るために、水試に沿岸調査船の建造が必要であるとの嘆願書を持って、管内をオートバイで回り、署名集めをしたそうです。こうした方々の努力の結果が、現在の三代目の試験調査船金星丸（函館水試所属）につながっていることを考える時、水試の現役職員として、毎日の業務をおろそかにはできないと感じています。

（吉田英雄 稚内水試場長 報文番号B2366）